



2003年東京支部合宿

2003年2月15日(土) 1:30pm—16日(日) 3pm

石川島研修センター

(神奈川県綾瀬市・小田急線海老名駅下車)

¥14,000

定員 80名 (先着順)

講師: 小山芳樹(東海支部)および

東京支部ティーチャー

演奏: 東京支部ミュージシャン

クラス(テクニック・コースおよびソシャル・コース)、
拡大委員会(約1時間)、イブニング・ダンシング

テクニック・コース— ステップ、フレージング、フォー
メーションなどをさらに上達させたい方。

ソシャル・コース— ステップ、フレージングも大切、
さらに踊りを楽しみたい方。

郵便振替でご希望コースを記入のうえ、お申込みく
ださい。ただし、クラス定員の制約からご希望のコー
スに浴えないことがあります。

郵便振替 00160-9- 64023

RSCDS 東京ブランチ

締切り: 1月22日(水)(定員になり次第締切ります)

イブニング・ダンシング・プログラム

Flowers of Edinburgh	1-5
Pelorus Jack	41-1
Wisp of Thistle	37-4
Happy Returns	Misc2
The Duke of Atholl's Reel	16-3
Lady Glasgow	Misc1
The Chequered Court	42-3
Culla Bay	41-2
The Reel of the Royal Scot	Lft27
Major Ian Stewart	35-4
Sugar Candie	26-9
Duke of Perth	1-8
Extra: The Reel of the 51st Div.	13-10

参加者にはあらためて受講コースその他を記した
案内紙をお送りいたします。

受付、段取りなどでみなさんのご奉仕をつのって
おり、ご協力お願い申し上げます。

お問合せは担当 佐藤裕治まで

東京支部クラス

ビギナーズ・クラス

再スタートしたビギナーズ・クラスの参加者は、ほと
んどが以前からのコースで勉強してきた人ですが、ス
コティッシュ・カントリー・ダンスは初めてという方もお
り、基本からダンシングを楽しんでいます。ほぼ2セッ
トで、いまはいろいろな reel of three を踊りはじめて
います。



2003年3月まで 第2・第4月曜日 1:30-4:30

(1月は27日のみ)

千代田区総合体育館5階・多目的室

¥800

講師: 中田多鶴子・トム鳥山

担当: 松田正子

ステップ・ダンス・クラス

「カントリー・ダンシングにも役立つ!」をテーマにし
たステップ・ダンスを10月から続けており、皆さんが
んばっています。



2月8日(土) 1:15-2:05

毎月第2土曜日 1:15-2:05

講師: 櫻井香枝

(会場はそのつどお知らせします)

東京支部クラス(つづき)

インターメディアイト・クラス

2月8日(土) 2:15-4:30

講師: 掛川純子

担当講師予定: 3月 長峯真弓・若松陽子

4月 渡辺悦子

5月 Helen Frame

6月 佐藤仁美

日取りと会場はそのつどお知らせします。

アドバンスド・クラス

2月1日(土) 6:30-8:30

講師: 西田淑子

担当講師予定: 3月 境 雅子

4月 他支部から(交渉中)

5月 Helen Frame

6月 年次総会のため休み

日取りと会場はそのつどお知らせします。

RSCDS 東京支部

チェアマン 鳥山豊喜(トム鳥山) T/F 044-988-7773

Email: Tomtori@aol.com

セクレタリ 鈴木百代 T/F 049-296-1766

Email: momo-gon@mbj.nifty.com

トレジャラ 境 雅子 T/F 047-368-3873

Email: spey3@aol.com

委員会メンバー 池間悦子 T/F 045-982-8528

佐藤裕治 T/F 0424-86-3929

藤田淑子 T/F 044-954-7235

松田正子 T/F 0438-23-0475

若松陽子 T/F 042-593-2446

ホームページ www.ne.jp/asahi/tokyo/branch/

同担当 吉澤敦子 T/F 0298-41-0767

東京支部拡大委員会

新運営委員会発足から約半年間の活動を振り返り、これからの方向を話し合う、いわば半期総会です。

2月15日(土) 4:30-5:45 (合宿時)

石川島研修センター

1. 2002年度の活動の反省

2. 2002年度の決算の見通し

3. 2003年度支部年会費の値上げ

4. プランテター新紙名(p.16参照)

5. その他

Exams Tokyo 2003

昨年11月末に受験生名簿を確定しました。概要は下表のとおりです。予備試験は1クラスに統合しました。

JEC2003(3支部合同委員会)メンバー:

東京支部 吉澤敦子(コーディネータ)・境雅子

東海支部 小山芳樹・勝崎秀信

埼玉支部 佐藤雅紀・田村妙子

東京支部試験実行委員会メンバーはいまのところつぎのとおりです。実施がさらに具体化するにしたい、さらにメンバーを増やしていくつもりです。

委員長 トム鳥山

副委員長 大野悦子(千葉地区総括)

境雅子(春日部地区総括)

会計 青木幸子

東海支部(参考)

フル試験 チューター: Bruce Frazer(英国)

予備試験 チューター: John Middleton(カナダ)

トレーニング期間: 4/27-5/2

いずれも東京・代々木オリンピック・センター

Exams Tokyo 2003 の概要

	フル資格試験(F-1組)	フル資格試験(F-2組)	予備試験(P-1組)
受験者数	10名	10名	10名
トレーニング期間	4/13-4/19	4/20-4/26	4/20-4/26
筆記試験日	4/25	4/25	4/25
筆記答案英訳日	4/26	4/26	5/4
実技試験日	4/29-4/30	4/27-4/28	5/8-5/9
Tutor	Helen Frame	Helen Frame	松橋順子
ミュージシャン	村上美枝子	小海弘子	嵯峨紀枝、市川洋子、本守明美
通訳(トレーニング・試験)	中田多鶴子	クレメント篤子	—
クラス・コーディネータ	五十嵐成子	佐藤仁美	大野悦子
トレーニング・試験会場	ぐるる宮代&進修館・他	ぐるる宮代&進修館	千葉市文化センター
宿泊場所	春日部エミナース	春日部エミナース	ホテルサンガーデン

(トレーニング・試験の会場が休館日のときは他の会場となります)

みなさんのクラスにヘレンを

Exams Tokyo 2003 のチューター終了後、ヘレン・フ
レームは10日間ほど日本に滞在します。

滞在期間:5月4日(日)ー5月11日(日)

この機会にヘレンのティーチングでクラスを開きた
いというグループがあれば(国内交通費、経費などを
ご負担いただくこととなりますが)、セクレタリまでお
早めにご希望をお寄せください(鈴木百代)■

支部役員改選

支部規約第4条第2項および第3項で三役を含む
支部運営委員の任期は1年と定められています。今
年の支部年次総会は晩春ないし初夏に予定して
おり、その際に運営委員の改選を行ないます。

選挙の公正をはかるため、支部規定はありません
が選挙管理委員会を設け、立候補者(推薦を含む。
以下同じ)を事前に明らかにして支部年次総会にの
ぞむべきと考えます。委員会できつのお二人に選挙
管理委員を委嘱することにいたしました。

近藤幸子 T/F 03-3916-5051

吉澤敦子 T/F 0298-41-0767

くわしくは次号の本紙で公告いたしますが、立候
補される方は選挙管理委員までお申し越してくだ
さい。

なお昨年の年次総会決議により、東京支部を通じ
て本部会員登録をした会員が立候補できます。立候
補締切りは4月20日頃を予定しています(Tom
Toriyama)■

サマースクール 2003

2003年のセント・アンドルーズRSCDSサマースク
ールの日程はつぎのとおりです。

前半コース 第1週 7月13日ー7月20日

第2週 7月20日ー7月27日

後半コース 第3週 7月27日ー8月3日

第4週 8月3日ー8月10日

申込み用紙はセクレタリまでお申し越してください■

クラス休止のおわび

11月から各ブランチクラスの定例会場確保
ができず、場所の変更やクラス休止のやむな
きがあり、申しわけありません。確保競争激化
のなかで、あらゆるつながりをあたって会場
取りに努力しています。(Tom Toriyama)

RSCDS 80周年

今年2003年はRSCDS創立80周年にあたり、75
周年ほどの大がかりな取り組みはありませんが、それ
でも世界各地の支部は記念祝賀行事を計画してい
るようです。

東京ブランチでも80周年を祝う記念行事を行ない
たいと思っています。時期は10月中旬を考えていま
す。

みなさんからのアイデアを参考に、どのようなこと
を行なうか決めたいと思っています。どうぞご意見をセ
クレタリまでお寄せください(鈴木百代)■

試験課題ダンス変わる

2003年6月から

予備試験およびフル資格試験におけるダンシン
グ・テストの課題ダンスは、2003年6月1日(日)から
つぎのようになります。(Exams Tokyo 2003はいま
までどおり)。ことしのセント・アンドルーズで受験を計
画されている方はこれらの新しい課題ダンスを勉強
していただくこととなります。*が新課題ダンスです。

予備試験:

Reels

Duke of Perth	1-8
The De'il Amang the Tailors	14-7
*Milton's Welcome	33-8
*Breachin Lassies	Misc1

Jigs

The Isle	Gr-15
The Linton Ploughman	5-6
Frog in the Middle	Misc2
*Mrs Stewart's Jig	35-1

Strathspeys

Bridge of Nairn	13-11
The Braes of Breadalbane	21-7
Lady Glasgow	Misc1
The Lovers' Knot	8-4

フル資格試験:

Reels

General Stuart's Reel	10-3
The Gates of Edinburgh	15-5
The Cumbrae Reel	28-8
*The Chapman	25-2

Jigs

The Golden Pheasant	16-9
The Duke of Atholl's Reel	16-3
Miss Hadden's Reel	23-5
*Follow Me Home	38-3

Strathspeys

Mrs Hamilton of Wishaw	23-9
Miss Gibson's Strathspey	Lft-18
Alltshellach	23-2
Village Reel	20-4■

ジーン・イエーツ、ビル・アイアランドを悼む

さる10月、ソサエティで重きをなし、すべての会員に愛されていたジーン・イエーツ、ビル・アイアランドがあいついで世を去りました。中村直香さん、春日寛司さん、松橋順子さんからお悔やみの文をいただきました。

Dear Jean

(東海支部 中村直香)



後列右から2人目 Jean、前列右から2人目筆者

街にイルミネーションが輝き始め、今年も Xmas が近づいてきました。私の Xmas カードの1枚が行き場を失ってしまいました。

Jean が亡くなった、という連絡を鳥山豊喜さんからいただいたときは、一瞬にして喉が熱くなってしまいました。Jean の笑顔、優しい声がよみがえります。

St. Andrews でのサマースクールに参加し、1991 年の Prelim テストのときも、1994 年の Full Certificate テストのときも、私の Tutor は Ms. Jean Yeats でした。

ご存知のようにサマースクールは前期と後期があり、さらに Prelim テストにパスしてから2年で Full テストを受験するのが一般的かもしれませんが、さまざまな事情で3年後に受験した私と Jean が Tutor と Candidate として出会うことができたのは、確率から考えてみてもまさに運命のような気さえました。

Prelim テストで参加したときは、受験生としての緊張とサマースクール初参加ということもあり、かなりピリピリしていました。

そのうえ、とくに最初の1週間は Jean の言っていることがほとんど聞きとれない状態であり、情けないやら悲しいやらで涙がいくどとなく流れました。それでもクラスは進んでゆく…。そのような状況でしたから、とにかく Jean の一挙手一投足、一言も聞き逃すまい見逃すまい、と必死の形相でかの女を見ていたことを昨日のように思い出します。

いまでも、黙っていると少し怖い顔や、それが突然笑顔に変わる瞬間、たぶんアバディーン訛りのしゃべり方や声が、目の前にいるように浮かんできます。

そして3年後に再会し Jean が Tutor とわかったときには、飛ぶように走り寄りかの女の胸に飛び込んでいました。この Full テストのときには、自分でも信じられないほど Jean の言葉が耳に入りました。「話し方、変えた？」と思うほどに…。

クラス以外でもたくさん話をしました。なんとアバディーンに日本人のツアーがくるたびに、荷物タグの“NAKAMURA”を見ては私がと思い、探したことなど。こんなに多い姓なのに!! またその後私がスコットランドに行き、たまたま地元紙に載ったことがありました。Jean には会っていませんが、ちょうどそれを見たかの女は新聞社から写真のオリジナルをとりよせ、日本まで送ってくれたこともあります。

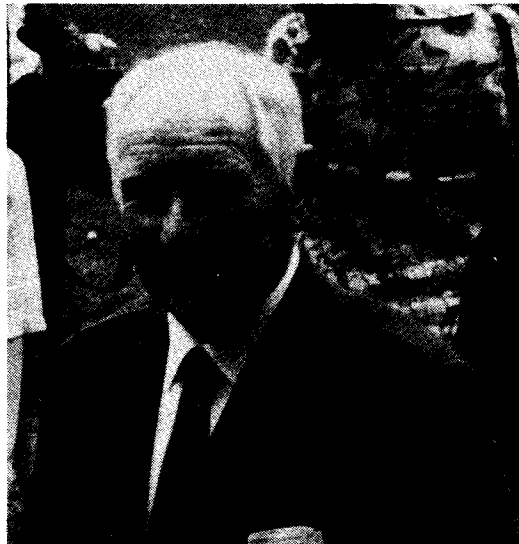
最近 Xmas カードにおたがいの近況や1年の報告をしていましたが、2年ほど前「入院」や「病気」の文字を見てから、とても心配していました。

もう一度 Jean に会って抱きしめてもらいたい! あの声を聞きたい! そう思う人は私だけでなく、世界中にいると思います。

心からご冥福をお祈りします。そして Jean、私はこれからも Happy dancing をモットーに踊り続けます。

Bill Ireland 氏のこと

(松橋順子)



98年8月、75周年ガーデン・パーティで。筆者撮影
London Branch のティーチャー。体育大学で長年教鞭をとり、退職してからはロイヤルバレースクールで SCD を教えていた。

1954年から Summer School のクラスを担当。1976年私が初めて参加したときにはすでにティーチャー養成コースも担当していた。どのクラスを受け持っても Bill のクラスは Summer School の中で一番ハードなクラスという評判だった。事実、1980年のトレーニング・コースで指導を受けたとき、そのパワフルなこと、またスピーディーなこと、指示の的確なことを身をもつ

て感じた。その熱意とヒューモアを私は全身で受け止め、それ以来、心の底深く敬愛の念を持ち、師事してきたのだった。私がティーチャーの卵として歩み出してから 22 年間、Bill はいつでも Summer School で待ってくださった。

Younger Hall での MC や、Bill のマウス・ミュージックで踊る赤いドレスの Jennifer Wilson (現ピアニスト) や Derek Haynes のデモンストレーションは出し物としてなくてはならないものだったし、宿舎のCOMMONルームでのケイリーでは絶妙の話術でプログラムをつなぎ笑わせ次を期待させた。

メイクアップをして目のさめるようなコバルトブルーのコートに白い手袋、ハンドバックを提げ、ハイヒールをはいて“クインマザー”となって登場、一言も発せず立っ。“？誰？”それが“Bill だ!!”とわかって満場を爆笑させたりもする。そしてすばらしいバリトンで独唱する。

それゆえ『東京ランチ設立 10 周年記念行事に招聘する指導者は Bill しかない』と心に決め、私は招聘と交渉の役目を引き受けたのだった。そして 1994 年 9 月 8 日 - 26 日帰国までの 18 日間、福岡、長岡、能代、岐阜、川越、東京と日本縦断のティーチング・ツアーに随行し、現地のメンバーとの仲立ちをした。9 月はまだまだ暑かったが、暑さのための汗だけではなく、極東の地の日本で行なうクラスに対する熱意とパワーからくる情熱の汗を振り飛ばした。

“そんな lead down は lead down じゃない。Lead down はこうするんだ”とサッカーボールをかつ飛ばすように次のセットの、それも 4 組の位置まで行って戻ってくる。“Lead して行くんだ…”と。

指導が終れば土地土地の味を好き嫌いなく味わう。朝は早く起きて宿泊施設のまわりを歩き回る - エネルギッシュでバイタリティーがあり、軽く弾むように踊る。ヒューモアとエスプリのきいた話術はすばらしかった。

病から快復し 2001 年の Summer School にはまったく元通りの元気な姿で現れ、皆を安心させた。

黒いジャケットの胸には赤いバラ。いま思えば赤いバラは特別だったのだ。バリトンの独唱で皆をシーンとさせた。Younger Hall のケイリーではティーチャー・クラス全員 (3 人 1 組になって) で Bill のマウス・ミュージックで *Shepherd's Crook* を踊ったのだ。

東京ランチから Bill の訃報を知らされたとき、あの独唱しているケイリーでの姿を想った。そして Jenny Greene から訃報のカードが届いたとき“あっ本当だ”と涙が溢れた。この 8 月、Summer School の食卓で Jennifer Wilson と、また私の部屋の前で Jenny Greene と “I miss Bill”、“I miss Bill very much”、“So do I” と云いあったのに。心から合掌。

ビル・アイアランド先生の訃報に接して

(春日寛司)

ビル・アイアランド先生の死去、スコティッシュ・ダンス界にとって誠に残念なことで、心からお悔やみ申しあげます。

想えば昨年 2001 年のサマースクール参加の際、まだ右も左もわからないわたし共が受付でまごまごしていたところ、「なに、部屋がどこかわからないの？じゃわたしが案内してあげる」と、わたし共のスーツケースをヒョイと持ち上げ、「ここがエレベーターで、ここから上がると目の前があなたたちの部屋です」。カビの生えかかった旧式のエレベーターの操作方法まで親切に教えてくれた。事務所の守衛さんかな、くらいに思っていたわたし共はサンキューと軽く言って別れてしまった。この人があの有名な泣く子も黙るビル・アイアランド大先生とは、このとき知る由もなかった。

わたし共参加の第 3 週目の主任教師はジョハン・マクリン校長。校長にキリキリ舞いさせられたあとの第 4 週の主任教師がビル・アイアランド先生だった。鋭い視線で生徒の様子をしっかりと見る。すこしうつむき加減に、あちらを見ているのかなと思うと目はこちらを見ている。足元のステップをしっかりと見ているのだ。同時に手の動き、生徒の視線、体の向き等見逃さない。うまく踊れなかったセットは踊れるまで何回もやり直しさせられる。

当時、フランスの仲間と遊び半分に参加していたわたし共は、これはバカンスじゃなくて軍隊に入ったようなもんだと悪口の言いたい放題だった。おまけにビル・アイアランド先生の有名なケイリーの小話はフランス人にはチンプンカンプンで、面白さがまるでわからない。ケイリーの小話ではイングリッシュを皮肉るものが多い。みんなここぞとばかり大喜びする。まじめな顔をしているのはわたしたち非英語圏の人、というわけで先生のすごさがわからないまままごごしてしまっただのだ。

ことし 2002 年サマースクールでは第 3 週の主任教師がジュニー・グリーン先生で、パートナーのビル先生にことし会っていないがどうしたのでしょうかと聞くと、「ビルは・・・がんでとても体調が悪いの」。なんのがんなのか聞きそびれたので、もういちど質問しようと思ったが、いまにも涙がこぼれ落ちそうなジュニー・グリーン先生の顔を見て質問を飲み込んでしまった (あとで他の人にきいたら白血病とのことだった)。

思えば、ビル・アイアランド先生のセント・アンドリュース最後の授業とケイリーに参加させてもらったわたし共はほんとうに幸せだったと思う。ご冥福を祈る■

Only is lonely

(Tom Toriyama)

国語の変化(乱れという人もいる)はいつの時代にもあったことだが、『食べられる』『食べれる』、自分に気に入らないものをすべて『むかつく』でかたづけ、『マジ?』の連発、『じゃないですか』をなんにでもくっつける、レジで『〇〇円からいただきます』など、以前はおかしな日本語であったものが時流にしたがってふつうに使われている。『声に出して読みたい日本語』類の大ブームや漢字検定受験者の増加は国語の変化を食い止めようとする人がいることを示しているが、大勢には逆らえないであろう。

さて、日本国内のスコティッシュ・カントリー・ダンス界においても、英語圏では使われていないおかしな表現、言葉が用いられている。

まず“only”である。これは東京のやや西の地が発信源のようである。“2nd, 1st and 3rd couples dance a six hands round to left only”という具合であるが、どのRSCDSのBookを見ても“only”は入っていない。“left only”と述べられるとさびしい気持ちになる。“hands round and back”と、backのない“hands round to left”を区別するために“only”をつけくわえたのであろうが、これはピリング・ブックの読みすぎであり、不要である。Old Nick's Lumber Roomのbars 25-32で“only”を入れて表現したらどのようになるか、考えていただきたい。

“first eight bar なになにに、second eight bar なになにに・・・”という言い方もおかしい。ダンスは32小節連続していて8小節ごとに両ヒールを床につけるわけではない。これも東京の西が発信地と思われる。資格試験のリカップのとき、自分自身を奮い立たせ、32小節を度忘れしないよう、8小節ずつ表現したやり方がいまではどこに行っても唱えられるようになった。RSCDSのBookにこの表現はないし、英語圏のMCはまずもってこのようなリカップはやらない。これもピリング・ブックの縦棒を気にしすぎた表現である。David Russell Hallのbars 17-32、The Last of the Lairdのbars 17-32はこのやり方では表現不能と思われるが、いかがであろうか。

第3に“line”である。“sides”の代用語として“line”が使われている。この“ライン”、東京の真ん中あたりから始まったらしい。ヤンガーホールで“ライン”といえばロングワイズ・セットの列数のことで、『4ラインズでは後ろが詰まりすぎ。真ん中にもう1ライン作って5ラインズで踊ろう』とMCが指示する言葉である。日本では、使っている本人は“sidelines”の短縮形と考えているようであるが、短縮して言うなら、“sides”である。“reel of three on the line”とのたまわれると、acrossでやるのかsideなのか、はたまたdiagonalのreel of threeなのか、とても気になる。

リカップあるいはウォークスルーのあと、日本人MCはしばしば“**That's all**”で締めくくる。英語圏のMCは説明をどのように縮めているか、ヤンガーホールや各種の録音で確かめてみた。

ダンスの題名を最後にもう一度述べて締めくくりしている。“..... dance a six hands round and back”、ひと呼吸おいて“(Let's dance) Minard Castle.”という具合である。こちらのほうが“**That's all**”よりもよいと思う。資格試験のときもお試しあれ。

“**cross over**”と“**change place**”ははっきり区別されるべきである。ピリング・ブックでは単純化をはかるため、すべて“**cross over**”の単一表記になっている。この本を頼りにしているとsideおよびdiagonalの位置交換もみな“**cross over**”になってしまう。

Back to the Firesideのbars 9-10は“**cross over**”、bars 11-12は“**change place**”ときちんと述べられている。すべての位置交換を“**cross over**”でかたづけられる人は少なくなっているが、より徹底されるべきである。

おわりに“**Ready...And!**”である。録音を聞くと、レスリー・マーティン、ブルース・フレイザー、ドロシー・ルーアズみな“**And**”の[d]を英語流でちゃんと発音している。日本ではこの[d]がなく、“**Ready ...Ann!**”または“**Ready ...Annel!**”になっている人が多い。われわれは英語国民でないし通じればいじやないか、との声もあろう。

しかしちゃんと発音しようと心がけると、発音なんかどうでもよいとするのでは大きな違いがある。Kingussie Flowerをキンググッシー・フラワーと言う人がいなくなったと同様に、現地で一般的に用いられている表現、言葉をなるべく忠実になぞるのが適正と思う。Bridge of Nairnはブリッジ・オブ・ネアンである。(ただしこんな例もある。Lady Home's JigのHome、サマースクールで確認したら、ヒュームというのが半分、のこりは「わたしんところではホームよ」)■

2nd Chord で手をとるのは任意

Book 42の講習会において“James Senior of St Andrews”および“James Gray”の2nd ChordでCross overするとき、『手をとる。これは他のダンスでも同じ』と申しあげました。

その後、内外のティーチャーに確認したところ、手をとるやりかたもあるが、そうしろということはない、とのこと。従いまして、『2nd Chord で手をとるのはダンサーの任意』に訂正します。

不十分な説明をおわびいたします。

(Tom Toriyama)

新チアマンにジーン・マーティン

- 本部 AGM 報告 -

(クレメント篤子)

11月1日(金)のスコットランド北東は濃霧だった。夜8時からウェルカム・レセプション、8時半から12時半までデイビッド・アンダーソン楽団の演奏によるボールが行なわれた。人数は 600 人。キャンセル待ちも多く、アバディーン近郊のダンサーの多さに感心。

11月2日は暴風が吹き荒れる日となった。吹き飛ばされそうになりながら会場に向かう。

9時半から執行委員会(ECM)開催。旧組織での最後の ECM である。特に興味ある事項をご紹介します。

試験委員会

- * NZ のマジ・レインがイグザミナーから引退。ジーン・イエーツ、ビル・アイアランドの死去でイグザミナーが減少。いままでもイグザミナー候補の査定はサマースクールで行なっていたが、今後は他でも可能とする。
- * グラスゴーで行なわれたティーチング・スキル・コースには10人のティーチャーが出席。
- * サマースクールでの英語圏外受験者のガイドラインを決める計画。
- * Prelim テスト受験者にとって Proficiency(熟練度)テストが有用。ただしまだ必修ではない。

出版・調査委員会

- * Book 36 と Book 37 の新録音終了。
- * ロイヤル・スコティッシュ・ジオグラフィカル・ソサエティ(地理学協会)に協賛してロイ・ゴールドリングの作った7つの踊りと音楽をまとめて出版。「スコシア百年祭」の祝賀夕食会で披露された。
- * ウォーミングアップの解説書およびマニュアル改訂版の発行間近。

9時半からのグループ・ディスカッションではアンドルー・ケレット司会のユース・ダンサー・ディスカッションに出席し、11時から1時間はアンドルー・マコーネル司会の「AGMでランチ・フォーラムを持つべきかどうか」の討議に参加した。後者ではランチの意見を反映できる場が必要、決議は不要、ランチから代表者1人、AGM ウィークエンドで開催、との意見が多数を占めた。

昼食後、2時半からデリゲート 303 人、傍聴者 116 人が起立する中、パイパーに先導されてチアマン、副チアマン、アバディーン市長、セクレタリ、功労賞受賞者、チアマン等が入場し、AGM が始まった。

チアマン、アラン・メアのあいさつ内容はマネジメント・ボード(会社の取締役会に相当する)の設立と柔軟な考えをもってほしい、ということだった。新組織では前チアマンの役割がないため、この AGM がアラン・メアの最後の任務となる。

女王陛下のメッセージ、アバディーン市長マーガレ

ット・スミスの祝辞があり、功労者表彰に移った。今回の受賞者は、デルフト(オランダ)のリーニ・キャンベル、スザナ・ヘーグル(ドイツ)、パトリシア・ケント(カナダ)、メルボルンのジョージ・クーパー、クイーンズランドのフィリス&ジム・サウス、そしてミュリアル・ジョンストンの7人であった。(当日出席はリーニとスザナの2人)。

前回の AGM 議事録が承認され、プレジデント(会長)、副会長が承認された。マンズフィールド卿はこととして25年間会長をつとめることになる。

セクレタリ、エルスペース・グレイから2002年本部報告がなされ承認された。以下の項目がハイライト。

- * 本部スタッフは5人いるが、サマースクールや各委員会への出席、振替休日等のため平均すると4人で実務をこなしている。
- * RSCDS 販売品の注文は大小混ぜると週に平均40件。訪問者対応などで忙しい。

チャリティ法に従って新書式による会計報告がなされ、承認された。

マネジメント・ボードの設置とそれにとりまわす規約改正が承認され、役員、委員の選挙結果が発表された。今回はじめてコンピュータによる集計が採用されたが、票数は公表されなかった。

今期チアマン:

ジーン・マーティン(アバディーン支部)

次期チアマン:

スチュワート・アダム(エディンバラ支部)

マネジメント・ボード:

マルカム・ブラウンほか全18名

総務・財政委員会:

委員長リチャード・タンブルほか全7名

会員サービス委員会

委員長アイリーン・ベネットほか全7名

教育・訓練委員会

委員長アレックス・グレイほか全10名

選挙結果でもっとも注目を集めたのが次期チアマンで、昨年の東京ランチ代表をつとめたスチュワート・アダムが当選した。

かれはエディンバラ・ランチのチアマンや、エディンバラ大学卒業生で組織しているダニエル・ダンサーズの会長をつとめたこともあり、エディンバラ・ランチのショウ「スピリット・オブ・スコットランド」の現プロデューサーでもある。建築関係の仕事にたずさわっていて 50 代の働きざかり、大学生と新社会人のこどもがいる。

アバディーン・ランチや関係者への謝辞のあと、AGM は4時に終了した。つぎの AGM は 2003 年 11 月 1 日パースで開かれる■

= This Dancing World of Ours =

ヨーロッパで踊るときは

(ロンドン支部 ジム・クック)

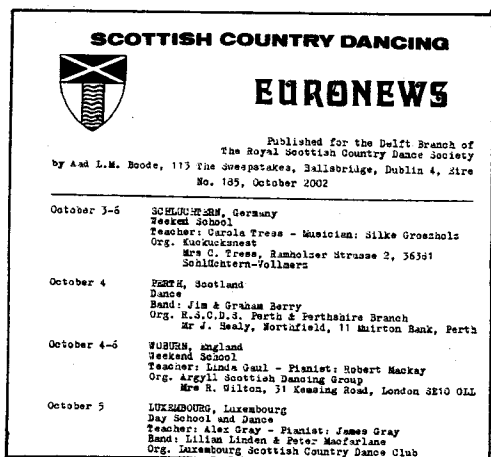
ヨーロッパ大陸で踊りたいが、その情報はだれに聞けばいいのだろうか？ そんなときわたしは二つの情報源、つまり Euronews と Celtic Circle を見ることにしている。

Euronews

この情報誌の編集者、アード・ボーデは背景をつぎのように述べている。

『これを発刊したのは1971年10月のことで、オランダ、デルフトのセント・アンドルーズ協会が精神的・経済的に支援してくれた。その後、同協会は1979年にRSCDSデルフト支部になった。発刊の目的は二つあった。おもに欧州大陸におけるイベントを会員に知らせること、そしてわれわれの行事を宣伝することである。30年たった今でも、2ヶ月に1回の発行を続けている。

1971-2年のダンス・シーズン中、合計27会場イベントがあった。内訳は大陸が17、イングランドとスコットランドが10である。2002-3年ではこれが328会場になっている。93が大陸、235会場がチャネル諸島、アイルランドを含む全英国である。2002年6月号では英国における28カ所の“サマー・ダンシング”を紹介しており、8月号は翌年1年間の176の行事を12ページにわたって記載している。



情報を提供してくれるのは Euronews を購読している各支部、各グループだが、わたし自身が集めた情報もある。

年間購読料は個人の場合£3.5、支部やグループの場合は£5.25となっていて、支部、グループの行事が載った場合でも追加の掲載料は不要である。購読料払込みはユーロ、ポンドのいずれでもよい。

Euronews の旧号を見ると、大陸で初めてバンド演奏による行事があったのはデルフト(1977&78年、ロ

ビン・エリス楽団)、コペンハーゲン(1978年、デニロウ楽団)そしてルクセンブルク(1979年フランク・リード楽団)である。いまでは大陸のソーシャル・ダンシング、ボールは英国の、あるいはその地区のバンド演奏で行なうことがあたりまえになっている。

数年前、転勤でわたしは住まいをアイルランドのダブリンに移したが、デルフト支部のために Euronews の発行を続けている。いろいろな人から情報を得るのは面白いし、発行が楽しいといえる。払込みの小切手に添えられた紙片に、「とても利用価値のある情報です」とか、「このすてきな仕事を続けてください」とか書かれているのを見ると勇気づけられる。わたしはずっとこの発行を続けられればと思っている』

Celtic Circle

つぎにフォルカー&アネット・ヴェートマン、ペーター・ヴェールの3人による Celtic Circle について、フォルカーのコメントは、

『スコティッシュ・カントリー・ダンシングは大家族の暮らしぶりに似たところがある。みなさんは住所や電話番号はわからないけれども、遠くに住んでいる兄弟姉妹の家族に会いたいと思うはずである。

やっと連絡先を聞き出したと思ったら、その大きなイベントは昨日終わっていた、ということがあった。このような情報不足を補うために、小さな情報誌 Celtic Circle があることを耳にした。これは1980年代の中ごろに創刊され、ドイツ、スイス、オーストリア三国におけるケルトのイベントを知らせるものであったが、やがて廃刊となってしまった。

1993年夏、議論を重ねたあと、わたしたちは旧 Celtic Circle グループの1人、リロとともに新しい Celtic Circle を再び立ち上げた(再刊時のリロの努力に感謝している)。その方針はつぎのとおりである。

- * 無料とする-大方の人たちは必要なものにしか金を出さない(3/4は生活費で、残りが趣味用である)。
- * 雑文はやめる(わたしは物書きではない)。
- * オランダ、ルクセンブルク、デンマーク、ブリュッセル、プラハ、トリノの各グループに要望を聞く。
- * 年4回の発行を年3回にする(これは本意ではなかった。文句はドイツ郵政に言ってほしい)。かつ、各グループには最低1部を送る。
- * その後、アイルランド系統の行事にはみなさん興味のないことがわかったため、この情報は1995年に削除した。

小誌の目的は情報を広めることで、その情報とは、

- * 日程がかち合わないよう、ボール、特別クラス、その他の行事要旨を前もって知らせる。

* レギュラー・クラスをやっているグループとその連絡先を知らせる。そうすればみなさんは観光や出張その他でその地を訪れたとき、そのグループに参加できる。

ときおり地図を付け加えるのがよいと思っている。コペンハーゲンやウィーン、アムステルダムがどこにあるか、みなさんはご存知である。では、ローゼンダール、バックナンクは？

やがてインターネット、Email による問い合わせが多くなってきた。わたしたちはベストをつくしたいと思っている。いまみなさんはつぎのやり方で Celtic Circle を見ることができる。

* 年3回発行の出版物形式(大陸におけるすべての SCD グループの名前、連絡先、行事日程、地図が載っている) - 休みの日に目をとおしていただきたい。

* Email - 地図はないが、年9回更新。登録者のみ。

* ウェブサイト - 地図つきで年9回更新。ただし個人情報保護のため、連絡先の住所と Email アドレスは記載していない。

とはいえ、英国およびヨーロッパにおけるダンサー、グループの幅広い協力がなければ情報誌の発行は困難である。手紙、はがき、Email、電話などで最新情報を送っていただきたい。

ウェブサイト: www.celtic-circle.de

Email: info@celtic-circle.de】

Celtic Circle のウェブサイトは、わがロンドン支部のウェブサイト www.scdlondon.freemove.co.uk にリンクしている。("Cook's Tours- How to go dancing in Europe" by Jim Cook, from The Reel No.241, Sep-Nov 2002, published by the RSCDS London)

[以上の文に続いて、ジム・クック自身がグループからスイス、南ドイツ、ウィーン、ブダペストを回った14日間の行程を記し、ついで 2002 年6月のブルターニュ、ラニヨンの"スコッツ・ボネット・グループ"訪問を書いているが、省略する。

ローゼンダールはオランダにあり、ベルギーとの境に近い。バックナンクは南ドイツ、シュトゥットガルト北方の町。Celtic Circle のウェブサイトを見ると、ドイツにはやたらとグループがあり、日本以上に SCD が盛んなようである。

東京-鹿児島間は約950km。これをヨーロッパにあてはめ、ロンドンから半径 950kmの円を描くとコペンハーゲン、ベルリン、ザルツブルク、トリノ、マルセイユをカバーする。英国、欧州のダンサーは日本の国内線に行く感覚で、しかも格安な国際運賃で、気軽に行き来を繰返している。情報誌の存在は心強いと思う (Tom Toriyama) ■

RSCDS 史料庫をみる

(ロンドン支部 ロザリンド・ザリディス)

『寒いわよ』史料庫は RSCDS 本部地下室にあり、階段を下りるときわたしはそう注意された。2002 年 6 月、長年の願いがかない、買ったばかりの柔らかいタータン・スカーフを巻いてわたしはずらりとならんだ灰色のキャビネットの前に立っていた。防寒用の耳覆いにはたじろいだが、ばかばかしいとは思わなかった。

史料庫は入手時期が 20 世紀初頭に始まる資料を収めており、ソサエティ初期からのメンバー、ミス・ミュリアル・ハドゥンによって 1951 年にこのコート・クレセント 12 番地に設けられた。1979 年、アレスター・マクファジェンを委員長とする出版・研究委員会によってつぎのような分類方針が定められた。

- スコティッシュ・カントリー・ダンスに関する資料。
- RSCDS の歴史に関する資料。
- スコットランドの伝統的なダンスと音楽に関する第 2 次的な活動のための図書館。

以来、收藏品は増え続け、地下室に降り立ったわたしはその量に威圧感、そしてある種の爽快さを感じた。900 点を超える資料は、手紙、写真、歌とダンス音楽集、ダンス解説書、新聞・雑誌の切抜きなどで、まさにトロール漁船で獲物を引上げたような様子であった。

アーキビスト(文書記録責任者)のジム・ヒーリーとわたしがはじめにひきつけられたのは、ロバート・バーンズのペン書きの手紙で、日付は 1796 年[バーンズの没年]と記され、スコテッシュ・ソング・ブックに糊付けされていた。わたしたちは興奮しながら、破れそうな茶色の紙に書かれた、流れるような筆跡を見つめた。これは知られざる重要文化財ではなからうか。

史料庫は面白い資料であふれるばかりであり、残念ながらコピーは許されなかったが、思う存分に閲覧することができた。1986 年のブレア城で行なわれたエイトサム・リール・ボールのプログラム、1920 年代にさかのぼるサマースクールの写真類、ミス・ミリガンの「コンフェッティ・ダンス(お祝いのダンス)集」などである。とくにひきつけられたのは 18 世紀中期の「デューク・オブ・パース御用達のカントリー・ダンス・コレクション」、そして 1886 年のメルボルンにおけるカレドニアン・ボールの資料であった。メルボルン協会の花形連による興奮に満ちたイベントが述べられ、ある女性は派手なイエロー・サテンをナイヤガラ・スタイルで背中におろしていた、と書かれていた。

資料を見るうちに、わたしは何をしたらいいのか混乱してきたが、粘り強く行こうと決めた。本部から国税局への 1978 年の手紙は、VAT(付加価値税)不払いの事例を示しているのでは? 1925.2.23 付けパース

支部の初回出納簿、ミス・ミリガンのハンドバッグ(黒くて恐ろしげで、頑丈そう)・・・



ミス・ミリガンのポートレートを背にしたエルスペース・グレイ。手にしているのはミリガンのハンドバッグ

けれどももう拾い読みで十分！資料にしばられて
いる時間は終わりにし、肝心なものの印象を読者に
伝えるべきときである。

史料庫の初期セクションは 18 世紀中ごろに始まる
大量の音楽、歌の資料である。“Ballads and Ballad
Airs”、“Lays and Lyrics” [直訳:歌と歌詞]、バー
ンズの歌と詩の本、そして音楽の資料である。それら
のタイトルには気持ちをゆすぶられるものがある。た
とえば、ロバート・ミラー収集による「ハイランド・バグ
パイプ用 Pibroaichs [バグパイプ用音楽]、Laments
[悲歌]、Salutes [敬礼の歌]、Marches, Reels, and
Strathspeys」、あるいはウィリアム・マーシャルの“世紀
の転換”と題する「ピアノフォルテ、ハーブ、バイオリ
ン、バイオリンチェロのための Scottish airs, Melodies,
Strathspeys and Reels etc.」である。

18 世紀、多くの批評家はスコットランドの人々の生
活と社交にいかにも音楽と歌が浸透しているか、おど
ろきをもって述べている。史料庫の豊富な資料はその
大音楽時代の証左である。

1730 年代まで曲とダンスは演奏者から演奏者へ伝
承されてきた。この場合、バリエーションの変化は避
けられない。1730 年代以降になると曲は手書きの譜

として残るようになり、1750 年代には印刷による器楽
ダンス音楽が生まれ、大流行がはじまった。史料庫
には当時の出版物が数点保存されている。とくに有
名なものは、偉大なフィドラー/作曲家、ニール・ガウ
による 1799 年のストラスペイとダンス音楽である。当
時、ニールと息子のナサニエルは盛況をきわめてい
た音楽とダンシング界の中心人物であり、舞踏会、
結婚式、各種の会合にひっぱりだこであった。二人
の手によるニュー・ミュージック集はこんにちのハリ
ー・ポッター本のように、最新刊発行が待ち望まれて
いたのである。

かれらの仕事は公爵夫人や伯爵夫人に捧げるた
めのもので、貴族階級にちなんで名づけられた曲の
リストは、相対的に下位階級に属するミュージシャン
が、上流階級に混ざり合っていたという事例をはっき
りと示している。音楽とダンスはスコティッシュの階級
にかかわらず広まったのである。

近代において音楽上強い影響を与えた人は、別名
‘ストラスペイ・キング’と呼ばれるフィドラー兼作曲者
のジェームズ・スコット・スキナーである。かれは 1843
年に生まれ、84 歳で亡くなるまでの間に 600 をこえる
曲を作った。その時代において、かれは伝説ともいう
べき人であったし、かれの音楽と歌はスコットランド人
にあまり愛された。史料庫にはたくさんのスコット・
スキナーの作品が収められており、その内容はストラ
スペイ、リール、パイプ音楽、マーチ、ホーンパイプ、
パストラル・エア、バイオリン・ソロ、スロー・エアそ
の他である。

ストラスペイ、リールのようなダンス用音楽とその他
の音楽とは区別なく綴じられており、その当時は歌謡、
コンサート音楽、ダンシング音楽が織り交ぜられてい
たことを示している。そのころの音楽会は、いろいろ
趣向をこらさなければ不評をかったのである。

よりダンスとダンシングに関する資料に移りたい。ダ
ンシングに関する最初期の文献は革装の ‘Second
Book of the Compleat Country Dancing Master’ とい
う小さな本である。1719 年に出版されたもので、18 世
紀に大流行したダンシング・ブックの先駆をなす本で
ある。1 ページに 1 ダンスが記述され、各ページの上
部にはきまって「大勢によるロングワイズ」の記載があ
る。あるダンスの説明はこんなふうになっている。
“The first Man setts to the 2d Wo”,そして終わりは
“then right and left quite round”。

これらのダンスは宮殿、劇場、そして民衆のボール
で踊られ、曲は「バイオリンまたは Hautboy [ホウボイ、
オーボエの古語]に適し」、ほとんどが「フルートの音
域内である」と書かれている。

イングランド、スコットランド両国でどんなダンスが流
行しているか、それを知ることが当時のダンス・ソサエ
ティにとってはとても重要であった。その証拠に、流
行していたダンス集がおびただしく発行されている。
わたしが手にしたのは 1750, 1787, 1792, 1796, 1804

そして1816年のもので、どんな踊り方なのかよくわからなかったが、*Monymusk* と *The Lassie wi' the Yellow Coatie* の2つだけはわかった。

18世紀、19世紀のボールルームにおけるエチケツト、マナー本も史料庫にたくさんある。集会場におけるエレガントな作法はダンシングの一部として重要視されていた。

スコティッシュ・カントリー・ダンシングの大衆性と重要性は18世紀末にほぼ頂点に達した。踊り続けられたとはいえ(とくに非都市部で)、スコティッシュ・カントリー・ダンシングは徐々にボールルームから少なくなっていく。20世紀初頭にはスコティッシュ・ダンスは忘却のなかに沈んでいったのである。

もう幾度となく記されているように、トラディショナル・ダンスを守ったのはミス・ミリガンとミセス・スチュワートの功績である。この時代の報告に筆を進めたい。

だが、わたしが該当のファイル群を調べはじめたとき、スコティッシュ・ダンスにおけるあと2人の知られざる初期貢献者の名前を思い出した。その2人とは、アバディーンのエイズベル・クラム、そしてカナダ・バンクーバーのメリー・マクナブである。

エイズベル・クラムは「ヒル手稿本」、つまり1841.3.22付けの“*Frederic Hill's Book of Quadrilles and Country Dances*”の拝領者だった。かの女はこの本にダンスの略記があるのを見つけ、注釈をくわえて1940年代、50年代に紹介・指導した。それがこんにち、われわれがレディス・ステップ・ダンシングと呼んでいるダンスのはじまりである。古い資料を精読することによって、18、19世紀にステップ・ダンス、それも女性にかぎるダンスがあったことがわかる。1812年の音楽集は‘*Pas seul for Miss Jane Forbes*’というダンスを述べているが、20世紀のはじめにそういったダンスへの好奇心はまったく薄れてしまった。エイズベル・クラムはステップ・ダンス復興の開拓者、第1人者と認められており、やわらかなバレエ・スタイルで踊られるステップ・ダンスは、スコティッシュ・ダンスに芸術性を加えるものとして、かの女の貢献は多大と評価されている。

史料庫でわたしがミセス・マクナブの名をはじめて目にしたのは、かの女の4つのダンスを記載した1948年のRSCDSのパンフレットである。そのうちの2つはわたしを魅惑させ、しかもほとんど踊られることのない *The Shepherd's Crook* と *The Hebridean Weaving Lilt* だった。かの女はまた、べつのオリジナル・ダンス *Bonnie Anne* と *Macdonald of Sleat* を紹介している。好奇心がわきあがり、わたしは奮い立った。

バンクーバーのミセス・マクナブは大きな能力をもったハイランド・ダンスのティーチャーで、ダンス集の

コレクターでもあった。1907年にバンクーバーに移住したかの女は、まわりはハイランド出身者ばかりであることに気づいた。かの女はハイランド・ダンスのスクールを作り、豪華で観客にうけるダンシングを興行し、かつバンクーバーにおけるスコティッシュ文化のすべての分野において活躍した。興味深いのは、古いダンスに対するかの女の深遠な思い、そしてカナダのスコティッシュ移民からそれらを吸収しようという意気込みである。かの女の傑出したコレクションにはドラマチックな剣のダンス、男女のソロ・ステップ・ダンス、トリオによるダンス、カントリー・ダンス、道化のダンスが含まれている。

かの女のコレクションのどれか一つを手にしたとき、ミセス・マクナブの劇風のダンスがいかに昔の形を映していたか、かの女がどのように解釈していたか、十分に思いやることができる。このように輝いた、独創性のあるダンスに相対したとき、この思い自体がいくらか古めかしいのかもしれない。

たくさんの人物、案件に光をあてたわたしの史料庫訪問も終わった。わたしにとってこの丸一日の報酬とは、ダンシングで音楽の開始を待っているとき、人、場所、出来事によって補強されたそれらダンスの真の姿が見えてくる、ということである。

たとえば *Miss Allie Anderson* である。わたしはミス・アリー・アンダーソンがRSCDSの初期においてたいへんな活動家だったことを知った。かの女はダンシングについて定期的に新聞記事を書き、1948年にはフロレンス・レスリーとポピュラーな *Duke and Duchess of Edinburgh* を共作した人である。

また、ジョン・ドルーリによる *The Duchess Tree*、この曲を見つけたのはジェームズ・スコット・スキナーの音楽ブックをめくっていたときだった。曲とダンスとは1世紀にまたがる組み合わせになるが、‘ストラスペイ・キング’によって残された音楽に触発され、ジョン・ドルーリはとてもすてきなストラスペイ・ダンスを作ったのである。 *The Eightsome Reel* はどうか？ それはサークル・ダンスつきの古いスリーサム・リールを組み合わせて1870年代にほぼできあがったもの、そしてたくさんのローカル・バリエーションがある、ということを知った。書きたいことはまだまだあるけれど……。

本稿をまとめるにあたり、大きな協力をジム・ヒーリー、アレスター・マクファージェン、ジェニー・グリーン、ビル・アイアランド、そして本部のエルスペース・グレイ、アイリーン・ワットから得た。深く感謝している。
 (“*Treasures uncovered at 12 Coates Crescent*” by Rosalind Zaridis, from *The Reel No.241*, Sep-Nov 2002, published by the RSCDS London) ■

ダンシング・イン・ロシア

(ロンドン支部 ジム・クック)

セント・アンドルーズやブダペストのダンス行事でイローナ・グメニュークと会ううちに、わたしはかの女のグループ、クバン・スコティッシュ・ダンサーズ *Kuban Scottish Dancers* を一度訪れてみたいと思うようになった。このグループはかの女が作り、クラスノダル市にある。クラスノダルはカフカズ(コーカサス)山脈と黒海との間のクバン大草原に位置し、果樹園、ぶどう畑、茶畑に囲まれ、ロシア人が休暇でときを過ごすところである。

飛行機旅行のスピードと気楽さはわたしの好みではない。かわりにわたしは8日間の長く、くねくねした汽車旅を選んだ。ロンドンからベルギー、ドイツ、ポーランド、ウクライナを経由する旅である。もっとも、もし急ぐなら4日間でこの行程を終えることができる。この汽車旅だけで一つの物語となるが、クラスノダルのダンシングという本文に戻ろう。

クラスノダルの2002年3月8日(金)は『世界女性の日』で、わたしの休暇のなか日であった。土曜日にイローナはケイリをアレンジした。場所は文化宮殿、すばらしいところで、広い木の床とステージがある。80人をこえる参加者があり、これはイローナの猛烈な働きと熱意によるものであった。この地方のダンサー、シンガー、ミュージシャンがかの女のもとにはせ参じた。イローナ・グループの会員、非会員を問わず、みんなが楽しめるようにシンプルなスコティッシュ・ダンスが用意され、わたしは2つのダンス、“*Welcome*”と“*Borrowdale Exchange*”を説明し、ウォークスルーをやった。イローナはただちにロシア語に訳し、わたしが忘れかけているところはおぎなってくれ、わたしの面目を保ってくれた。

この特別な機会をとらえて、イローナは地元 TV 関係者を呼び寄せ、わたしはロンドン支部からの参加者として、思いがけないインタビューに出演させられた。ここでもかの女は通訳として活躍した。すべてが忘れがたい経験だった。

日曜日にはクラスが行なわれ、わたしはこどもクラス、成人クラス両方に喜んで加わり、イローナとティーチングを分担した。そう、こどものクラス、わたしがだ。イローナはステップ練習で1セットのこどもたちを指導し、その日は *skip change of step, pas de basque* を集中的にやった。ついでわたしが *Book 40* の *A Reel for Jeannie* を指導した。注意深く、行儀がよく、熱心なこどもたちに指導することができ、わたしはうれしかった。こどもたちに共通する熱意を見ると、スコティッシュ・ダンシングの将来はもしかしたらロシアにあるかもしれない。カップルごとのウォークスルーのあと、すぐにダンシングである。*A Reel for Jeannie* はコーチしやす

い踊りで、*casting* や *arch* フォーメーションは手によって例を示した。1人の親御さんがわたしの動作をまるで職人の親方のように笑ったが、わたしはむしろ交叉点で交通整理をやる警官のようだと思うている。

成人クラスに進んだ。ほとんどがヤングの3セットだった。イローナのクラスはたいへん苦勞している。口コミで毎週新しい人がやってくるのである。新人に対応するため、クラスは2歩前進・1歩後退というやり方になる。たとえば英国における各グループの年齢層を思い浮かべてみれば、みなさんはイローナのやり方に賛成すると思うし、敬服するだろう。なにしろ新人は若いダンサーばかりで、しかも男性なのである。

日曜日、*pas de basque* や *rights and lefts* のようなベイシックを会得してもらうことからはじまった。ステップ練習のあと、イローナは *Wild Geese* を指導し、わたしは *The Machine without Horses* の指導を頼まれた。各カップルにはイローナの通訳が添えられ、音楽がはじまるとわたしは1歩下がってダンサーをコーチした。この日も TV カメラが一緒だった。

月曜日は期待と不安が入り混じる日だった。つまり、ロシアの TV ニュースで週末のダンシングが放映されるかどうかである。心配無用だった。英国とおなじく深刻なニュースのあとには心をなごませるトピックスが一つ二つ入る。甘いお菓子のようなニュース、それがわれわれだった。モスクワからウラジオストックまで、全ロシアにクラスノダルのスコティッシュ・ダンシングが紹介されたのだ。

イローナはいまダンス演出プランを考えている。スコットランドの伝説にもとづいたストーリーで、「リバーダンス」形式でクラスノダル劇場で公演しようというものである。ケルト文化に関心をもつグループが毎土曜日に会議をつづけている。

イローナは当惑するかもしれないが、かの女はまさしく適時適所の適材である。こどものころ、かの女の生活はダンシングを軸としていた。最初はバレエ、ついで競技としてのボールルーム・ダンシングである。スコティッシュ・カントリー・ダンシングに出会ったのは1997-98年、ブリストルに滞在していたときで、ブリストル大学ロシア学部の語学助手として働いていた。

RSCDS ブリストル支部のフィオーナ・グラントはこう回想している。『はじまりは若い赤毛のロシア娘が木曜日のクラスにやってきたときよ。わずかのレッスンで、姿勢と正確さを保ってトリッキーなフォーメーションをすぐにこなしたのはみんなびっくりした』。

かの女の能力に感心したブリストル支部はセント・アンドルーズのサマースクールに行くよう、旅費の補助とともに支援した。ジーン・ミリガン記念基金の奨学金を得て、イローナは最初の週はビギナーズ・クラス、翌週はアドバンスド・クラスに進級した。翌年のサマースクールではベリー・アドバンスド・クラスに進み、

木曜夜のデモ・チームに選ばれた。

ブリストル支部はイローナのソサエティ個人会員登録を進め、クバン・スコティッシュ・ダンサーズのアフィリエート・グループ化登録を支援した。公式にソサエティ名簿に登録されることによってロシア官庁の意向に合っているグループと認められ、いまグループが使っている文化宮殿のような公共施設が利用できるようになった。

しかし、別の面もある。地理的、経済的条件によって楽しさと熱意が妨げられているのを見るのはせつない。ロシアではやわらかいダンス・シューズは入手困難なため、各グループ、各人に援助要請中である。ロシアの大学講師の年収は300英ポンドそこそこで、手作りできない服装をグループにゆきわたらせるのは不可能である。女性たちはすてきな白いドレスとタータン・サッシュをもっているが、男性のキルトは深刻な問題である。クバン・グループは地元でデモンストレーションを依頼されているけれど、キルト、スポラン、ソックス、フラッシュが入手できれば男性のいでたちに利となるだろう。グループは拡大を続けており、キルトの必要性も続く。グループ所有のキルトに加え、女性用タータン・スカート2枚が男性ダンサーに割りあてられている、という状態なのだ。

ブリストル支部は現実的なやり方でグループを強力にサポートしようとしており、個々の会員もブック、CDを寄付している。とはいえ、適切な音響システムの購入はいまのところあまりに高価である。ブリストル支部はジレンマのなかにある。かなたのグループを支援したい、しかし支部のチャリティ条項で余剰金はブリストル地区に限って使用しなければならない。支部は、多くの若い人が興味を保ち続けてくれること、そして各クラスのあとでイローナの声のかすれを防ぐことをとても気にしている。われわれは音響システム設置の手助けを必要としており、そしてクバン・グループに本部あるいは善意の人から資金提供がなされることを期待している。イローナ・グループの若い人たちへの援助はかれらのPR活動が進展するだけでなく、RSCDSの宣伝にもなる。みなさんが個人的に、あるいは支部全体でダンス・シューズや盛装キルトのスポンサーになってくれないだろうか？

クバン・スコティッシュ・ダンサーズは地元への浸透、会員数、宣伝で発展中である。わたしの訪問以後、5月に“Ball of the Clans”が開かれ、200人のダンサーがスコティッシュの文化と歌の夕べを過ごした。さらに同グループはウラル山中のペルム(行くのに2日かかる)で開かれた4日間のスコティッシュ・ロシアン・フェスティバルに招かれ、公演を行なった。

2001年におけるひとつのデモンストレーションは、ロシア人がもっとも愛する詩人の1人、ミハイル・レーロモントフ[1814 - 1841]の死去160年記念のフェス

ティバルだった。かれの先祖はスコティッシュ・ボーダーズ出身のレアマンズ Learmonth ファミリーである。フィオーナ・グラントが不思議な符合を語ってくれたが、つい最近行なわれたRSCDS執行評議会はエジンバラ、レアマンズ・テラスのレアマンズ・ホテルで開かれたとのことだ。

他のスコティッシュ・カントリー・ダンス・ファミリーから隔離した地であって、イローナの決意と熱情なしにこのグループが示すような勢いを維持するのは不可能である。すべてのグループに対してセント・アンドルーズのサマースクールへの参加を条件とするのは適切でない[サマースクールはどこでやられてもよい]。イローナはロシアにおけるサマースクール開催を望んでいる。計画は進行中で、時期は2003年9月5日(金)から14日(日)までの10日間、RSCDSメンバーはだれでも参加できる。風光明媚な、そして訪れる機会の少ないロシアの地におけるもてなし、楽しみ、ツアーは音楽(デビッド・クイーン、アンドルー・ライオン、ジェイムズ・グレイによるスコッチ・メジャー・バンド)とティーチャー(交渉中)によってさらに完全なものになるだろう。コサックの国でコサック・ダンスを見物するのはいかがか(踊るのも)?

クバン・グループへの基金、ダンス用品に関心をもつ方、冒険的な休日に関する案内を得たい方はフィオーナ・グラントにご連絡願いたい。

あなたが2003年9月に黒海に行かれるのなら、あなたの寄付が無駄になっていない、真摯なダンサーたちに会えると思う。“Dancing in Russia” by Jim Cook and Fiona Grant, from The Bulletin No.80, Oct 2002, published by the RSCDS) ■

35周年記念行事を終えて

(有田典和)

2002年10月12日から14日、2泊3日の日程でメリー・マレーとミュリエル・ジョンストンを岐阜に招聘し、35周年記念のワークショップとボールを開催しました。岐阜スコティッシュ・カントリー・ダンス・クラブはこの節目の機会に長年の願いを込め、また自分たちだけでなくたくさんの仲間と一緒に楽しむ記念行事を企画しました。

1999年のRSCDSサマースクールに参加したとき、ロンドン支部主催のワークショップはメリー・マレーとミュリエル・ジョンストンがゲスト、という話しを聞き、もしかしたらお二人を日本に招聘することができるかもしれない、という思いが大きく膨らみました。

メリー・マレーは1991年に日本フォークダンス連盟35周年記念にゲストとして来日し、SCDを指導しました。そのときの華麗なダンシングが印象的であったことを記憶しています。その4年後の1996年、2度目

の来日のときは岐阜、瀬戸、そして大阪へと足を伸ばしていただきました。岐阜におけるワークショップでもメリーの指導は好評で、ボールのデモンストレーションにおけるレディス・ステップ・ダンシングは最高でした。懇親会でも素晴らしいのを披露してくれました。

ミュリエル・ジョンストンとはじめて会ったのは、わたしたちが1996年の春、カリフォルニアのワークショップに参加したときです。ダイナミックかつデリケートに、そしてつぎつぎとエネルギーに演奏する姿に圧倒され、踊るのも忘れて演奏を聞いていました。ミュリエルからサイン入りのCDをいただき、大切な記念となりました。

ミュリエルはそのときのことをよく覚えていて、今回会場の下見のとき、はじめにピアノに向かい、このCDのなかの1曲を弾いてくれました。わたしたちの好きな曲がどうしてわかったのでしょうか？

世界中をまわって指導しているお二人を同時にお招きするなど、不可能かもしれないと思いながら手紙を出しました。しかし、こころよく承知していただき、2002年10月ならば120%だいじょうぶ、必ず日本に行きますとの返信を受け取ったときには飛び上がる

ほどのうれしさでした。

その勢いに乗じて準備も順調に進み、そのうえ好天気にも恵まれました。5回のワークショップは想像以上に素晴らしい内容でした。ご参加いただいた方はそれぞれの立場で勉強され、楽しまれたと確信しています。

ワークショップ前日には音楽クラスを行い、ミュリエルから、ダンサーに楽しく踊ってもらうには、をアドバイスしてもらってボールその他のダンス曲を練習しました。今回生まれた“Muriel and Gifu Castle Band”によるウェルカム・パーティ(8人編成)、ボール(6人編成)の演奏は最高でした。

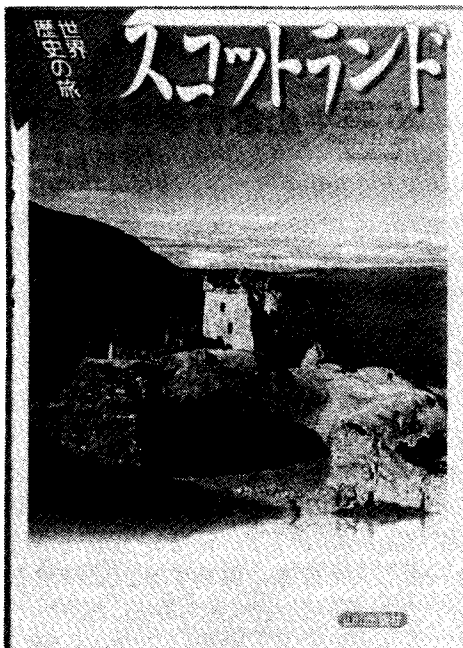
菊池さん(盛岡)、大森さんと益崎さん(大阪)、本守さん(瀬戸)、ロバートさん(オーストラリア)、そして琴の今尾さんとお二人の方にお礼申し上げます。すべてライブ演奏で、という夢がかないました。

わたしたちは皆様とともに至福のときを過ごすことができ、ほんとうに感謝しています。これからも機会があるたびに多くのティーチャー、ミュージシャンを招聘したいと思っています■

新刊紹介

(Tom Toriyama)

世界歴史の旅 スコットランド 富田理恵著



スコティッシュ・カントリー・ダンスのなかにはスコットランドの歴史に関する題名をもったダンスや音楽が多い。プリンス・チャーリーにちなむダンスがそうで

あるし、そのものずばりの1314というタイトルのダンスもある。さらにスコットランドの地名に関する題名のダンスが数多く存在する。地名、つまりその土地はそれぞれに歴史をもっている。ダンスを踊るとき、そのダンスにどのようなわれがあるのか、スコットランド史とどのようなつながりがあるのかを知れば、いっそうの興味とともに踊ることができる。

またスコットランドを旅行するとき、城や修道院の廃墟をふーんと見物するだけではなく、どのようにしてそれが作られ、どうして廃墟になったのかを知れば感慨はより深くなるだろう。

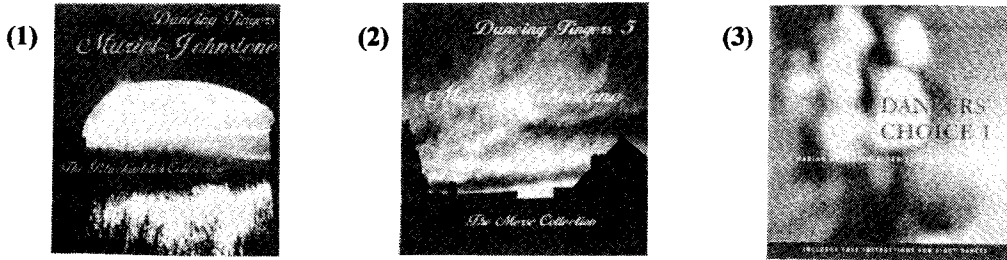
本は2つの部に分かれ、第1部はローマ時代から2000年10月までのスコットランドの歴史をのべている。登場人物は多岐にわたり、しかも宗教に関する抗争内容が多いため、読んでいるうちに頭がいたくなることもある。1707年のイングランドとスコットランドの併合はスコットランドにとって悪いことばかりではなかったという。

第2部はエジンバラ、グラスゴー、ハイランドなど各地の史跡がくわしく書かれており、セント・アンドルーズについても6ページにわたって紹介されている。

そのほかにマクベス、メアリ女王、バーンズなどのコラムが面白く読める。

日本語によるスコットランドの手軽な通史として手元におかれることをおすすめする。カラー図版、地図多数。(山川出版社。¥2,300)■

新 CD 紹介 (Tom Toriyama)



- (1) **Dancing Fingers 4 – music for the Blackadder Collection (SSCD 13) by Muriel Johnstone**
 The Blachadder Jig (8x32J), Blackadder House (8x32S), A Hastings Welcome (4x32R), Ewan Telford's Strathspey (4x32S), Celebrating Jig (4x32J), Carol Palmer's Strathspey (8x32S), The Hawkesbury Rant (4x32R), Bonnie Gallowa' (4x40S), The Lassie Frae Glasgow (8x32J), Jim Dougal of Eyemouth (3x32S), The Craven Jig (4x32J), The West Highland Line (8x32R)
- (2) **Dancing Fingers 5 – music for the Merse Collection (SSCD 14) by Muriel Johnstone**
 Marcia (8x32R), A Highland Welcome in Switzerland (64S), Trip Around the World (4x32J), Nothing in Common (6x32S), Irene McLean of Duns (4x32R), The Falkirk Lass (8x32S), See You Down Under (4x32J), The Rocking Horse (2x(48S+48J)), The Ruby Hornpipe (3x32R), The Scottish Castle (64S), Sheena's Buckle (8x32J), Par for the Course (8x32R)
- (3) **Dancers' Choice 1 (HRMCD601) by Marian Anderson and her Band**
 The Craven Jig (4x32J), *The Bonnie Beauty Blooms (8x32R), *Nethy Bridge (8x32S), Jessie Wiseman's Reel (8x32R), *Bellstane (8x32R), Mid Fodderletter (4x32S), Woodland Assembly (2x64J), *Corrievrechan (64S+64R), Haddington Assembly (8x32J), *Neko's Reel (4x32R), Maggie Lauder (8x32S), *Good Friends (4x32J), *Kirlmaiden Strathspey (80S), The Falls of Rogie (8x32R), *The Wedding Link (8x32J)
 *はダンス・インストラクションつき

(1)と(2)は既発売の3枚の同名CDに続くもの。岐阜グループの35周年記念に来日したミュリアル・ジョンストンが滞在中に注文をつのったので、すでにお持ちの方もおられる。

両方とも対応するダンスブックのための音楽で、民謡の Bonnie Gallowa' (ビル・リトル作のダンス) 以外はすべてミュリアルの作曲である。ミュリアル自身のピアノと電気ベースによる演奏はいつものとおり流麗である。演奏時間はまた長くなり、8x32のリールは約5分、8x32のストラスペイは9分である。

以前に出た Dancing Fingers 1-3 はロニー・カーリーがベースをつとめ、よく聞かなければわからないほどのサポートであった。こんどの2枚はミュリアルが全部をやっている。

ダンスブックと楽譜集(代替曲入り)は別売。

【注文略号: ブラックアダーCD・ブラックアダーブック・ブラックアダー楽譜
 マースCD・マースブック・マース楽譜】

(3)はRSCDSダンスが1曲入っているだけで、ディリック・ヘインズ、ジョン・ドルーリ、バリー・プリディ作のダンスのための音楽である。マリアン・アンダーソンが各地で演奏したときにダンサーから録音要望のあったもの、そして自分が録音したいと思ったものを集成した。引続きのCDが期待される。説明書裏表紙の写真、右から2番目がマリアンである。

第3トラックの Nethy Bridge は説明書では6x32となっているが、実際は8x32で録音されている。現代的、軽快、艶やかな演奏で、ストラスペイにおいてはマーチはしっかりしたリズム、エアでは美しい流れが

楽しめる。【注文略号: マリアン・アンダーソン CD】

なお、ブランチレター前号 No.57 でご紹介したフォーカーク支部のCD、日本への輸送中にプラスチックケースの損傷があり、やむを得ずそのままご注文者にお送りした。損傷ケースをお受け取りになった方にお詫び申しあげる。

また、カントリー・ダンスCDについてはフルのダンス説明書が送られてきた。同CDを購入された方で、ご希望の方は実費にてダンス説明書をお送りする。

【注文略号: フォーカーク説明書】

これらのCD、ブックのご注文は

郵便振替 00240-0-63517

東京ランチ

(この口座は物品購入専用です)

締切り 1月21日 (火)

ブラックアダーCD	¥2,800
ブラックアダーブック	¥1,600
ブラックアダー楽譜	¥2,900
マースCD	¥2,800
マースブック	¥1,600
マース楽譜	¥2,900
マリアン・アンダーソン CD	¥2,800
フォーカーク説明書	¥600

いずれも送料込み。最近の円安傾向を反映して少々高くなっています。担当 藤田淑子■

RSCDS 埼玉支部新春パーティ

2003年1月19日(日) 1.00-4.30

宮代町進修館

(東部動物公園駅3分)

¥800

連絡先 埼玉支部セクレタリ 佐藤雅紀

048-885-1894

大奮闘の支部レター発送

支部レターの発送はどのようにして行なわれているかをお知らせしましょう。袋詰め・差出しという、言葉では単純な作業ですが、支部には作業場がなく、約400通の重さはレターのみで20kg(年会報などを同封すると40kg)になり、郵便局への運搬はとてむたいへんです。

また400通のフラップ(封筒の糊付け部分)を折る、宛名ラベルを貼る、レターにチラシを織り込む、封筒に詰める、糊付けする、発送前の検査をする、差出し数を数えるという、単調でミスが許されない作業をするのは1日がかりの困難な仕事です。

いろいろ考えたすえ、交通至便、365日24時間営業の東京中央郵便局でこの作業を行なっています。郵便局内の作業なので、運搬車不要・差出しまでの遊び時間なしが利点です。

印刷業者から局止めで送られた印刷済みレターを同局で引取り、空き機を利用して一連の作業を運営委員全員で行なっています。1時間半ほどの作業のあと、その場で委員会開催というのが今年のスタイルです(鈴木百代)■

未使用の年賀はがきを支部に

お宅に不要となった未使用の年賀はがき、書損じの年賀はがきがあれば、どうぞセクレタリにお送りください。

ポストに入れていない年賀はがきであれば、1枚5円で普通はがきや切手に換えることができ、未使用なら、そのまま支部のお知らせ用に使うことができます。(消印がなくても、配達されたものは交換できませんのでお手元に)。

支部財政ご支援のため、1、2枚でも結構ですのでどうぞお送りいただきたいと存じます(鈴木百代)■

ミス・ミリガンのハンドバッグ (ビル・クレメント)

本紙10ページ、ハンドバッグを手にしているエルスペース・グレイの写真をロンドン支部の機関紙で見て、ありし日を思い出した。この大きな黒いハンドバッグにはジーン・カレンダー・ミリガンのイニシャル、JCMが浮き上がりで入っている。

ソサエティの25周年記念AGMは1948年にグラスゴーの象徴ともいえる市庁舎で行なわれたのだが、このときお金入りの札入れも付けて(これはひとに聞いた)、同じハンドバッグがミセス・スチュワートとミス・ミリガン、それぞれに贈られたのだ。

わたしの知るかぎりでは、ミス・ミリガンがソサエティからプレゼントをもらったというのは、後にも先にもこれ1回だったし、とてもうれしそうだった。でも大切にしていって、使うことはなかったよ。

ランチレター新紙名は?

前号でランチレターの新しい紙名について、候補をみなさんからお寄せいただき、2月の拡大委員会で決めたいとお知らせしました。いまご提案いただいている候補はつぎのとおりです。

「東京ランチレター」(いままでどおり)

「さくらリール」

新紙名候補の締切りまでにまだ余裕がありますので、これぞと思われるものをぜひセクレタリあてお寄せください(鈴木百代)■

グループ行事業内

葛飾スコティッシュ・カントリーダンス・クラブ
17周年パーティ

2003年3月23日(日) 12.30-4.00

葛飾区総合スポーツセンター「エイトホール」
(京成青砥駅または立石駅15分)

¥1,000

連絡先 尾身信晴 03-3697-5838

次号は4月発行予定。5-8月の行事お知らせう